

■陵辱地下闘技場 v s 金木みく

広々としたホール、中央にはライトに照らされた格闘リング。
その上には観客席四方に向かって映し出される4つの大きなスクリーンがある。
会場を埋め尽くす観客。リング、その様子を映す画面を見て、怒号と歓声が飛び交う世界。

【さあ！ 現役女子大生ファイターのさやか選手！ ここから挽回出来るか〜っ?!】

アナウンスにつられてリング上に目をやると、艶やかなビキニ姿の若い女性が、対戦相手の大男にチョークスリーパーをキメられ悶えている。

彼女はもう既に泡を吹いて白目を剥いているが、男はお構い無しにビキニショーツを脱がし、彼女の股間を握り潰していく。

【チョークスリーパー最中の股間へのアイアンクロー！ さやか選手、堪らず失禁してしまった〜!】

さやかが白目を剥きながら股間を潰され、おもらししながら痙攣している様子が大型スクリーンに映し出される。

あられもない姿を見た男性客は、更に歓声を大きくさせた。

だが女ファイターへの仕打ちはこれで終わらない。

このリングで敗北した者は人権を剥奪され、奴隷として扱われる運命が待っているのだ。

更なる陵辱を受け、啼き叫びつつも善がり狂う「牝」と化した女。

観客たちは彼女が壊れるまで狂宴を繰り返す。

【今回も白熱の試合を繰り広げた地下闘技場！ 次の獲物は……エロリンピックで活躍したこの女だ——!】

続いてスクリーンには、あるイベントで痴態を晒した女性が映る。

次の獲物を知り、彼女も闘技場で鬨られる様を想像し、観客たちは再び大きな歓喜の叫びを上げた……

——……

—————.....

【……金木みく、だな？ 見させてもらったよ、エロリンピックでの活躍】

「な、何の用よ？」

【いやあ、あの件でさぞ不便してるんじゃないかと思ってね……もし、私がこの件を「無かったこと」にできると言ったらどうする？】

「えっ？」

みくが地下闘技場に誘われたのは、とあるイベントがきっかけだった。
淫魔が開催する性の祭典、「エロリンピック」——パイプホールド、フェンシング、タマ挿れなどの競技により、みくは見事なまでの痴態とドMっぷりを晒してしまった。

淫粉症——花粉症の淫界版で涙などの代わりに愛液などが出やすくなる病——に罹ったのもあり、町内会の男たちから完全に性的な目で見られていた。

一線を超えた行為に悩まされる日々。そこに目を付けたのが、エロリンピック委員会の一員で「陵辱地下闘技場」を運営する男。

おぞましいまでの陵辱を受けたみくにに対し、運営は闘技場への参加を持ち掛ける。

もし試合で勝利できれば、エロリンピックを通して配信した映像の削除、みくの痴態を観た者たちの記憶消去、更に淫粉症の治療までしてくれるという。

「えっ……淫粉症まで？ ほ、本当にそんなことが……」

【無論、我々なら可能だ。人間界より遥かに進んだ淫気関連の技術を有しているからね。即座に症状を抑えらるし、時間さえかければ完治も容易だ】

「……そう、ですか。……でも、もし負ければ……？」

【んん……まず、参加を断るならば、男性視聴者の記憶はそのまま。更に映像は委員会の宣伝のため、全世界に無料配信する予定だ】

「そんな！」

負ければ、ではなく参加を断れば、と話がすり替えられているが、痴態の更なる流出を聞かされ、みくは正常な判断力を失ってしまう。

【とはいえ、我々も鬼ではない。実はみくさんの真っ当な活躍が見たいというスポンサーがいてね。彼らが当て馬を用意してくれるから、そこで本来の身体能力を発揮して欲しい、という話だよ。鍛えているとはいえ女性、しかも主婦だ。オモテの試合はなかなか出られないだろう？ 日頃鍛えている成果を発揮したくないかね？】

更に、一度脅した後に自尊心を刺激するような言葉も使って捲し立てる。

話を真に受けるならば、非合法な闘技場といっても、みくの対戦相手はアマチュアの当て馬。実質的な出来レースの試合だと、みくを安心させて調子に乗らせていく。

「……ほんとに、勝ったら動画とかを消してくれるの……？」

【ああ、約束しよう。まあ、素人にすら勝つ自信がないというなら結構だが……】

「よ、余裕で勝てるもんっ……！」

みくは週に一、二回ほどボクシングジムに通い、生半可に自信をつけている。

アマチュア相手ならば大丈夫だろう。そう思い込んだ彼女は、何も知らずにその場で契約を交わしてしまう……。



——.....

—————.....

そして試合当日。

みくは未だに地下闘技場をただのアングラ格闘試合と思っているが……一応は平等で公平な試合、という形式を取るものの、実際には鬼畜趣向の主催者が開くSMショーといったものに近い。

試合はノールールな上、マッチングは明らかに実力差があるものばかり。

予定調和に勝利した闘技場代表が弱者を陵辱し、矜持の様子を見世物にして楽しむ最低の興行。

エロリンピックやバトルファックよりも陵辱度、拷問度が高いこの闘技場。

滅淫士という淫魔・混沌を退ける者に属するとはいえ、その中では最下級、というかもほぼ普通の人妻であるみく。

鬼畜な変態ばかりが集まる闘技場などに参加すればどうなるか。

悲惨な未来以外は待っていないはずだが……。

「所詮アマチュアの大会だし、一勝すればいいんだし大丈夫でしょ♪」

何も知らされず、本当に勝てると思って気楽な様子のみく。

みくに与えられたチャンスは三戦。

その中で一勝でもすれば動画・記憶の削除と淫粉症の治療が果たされる。

早くも勝った後のことを考えながら、ボクシングジムで使っているスポーツブラにショートパンツの姿でリングに上がる。

『さあ！ 次の女性は今回初参戦！ 若妻ファイターのみく選手です〜っ！

彼女は生き残る事が出来るのか！？ それともこの人妻も矜持殺しにされてしまうのか〜！？♥』

リングの上にある巨大スクリーンに、みくのプロフィールとボクシングウェア姿でファイティングポーズをとる画像が出現。

——みく 28歳 滅淫士（人妻）

148cm 41kg Aカップ パイパン

得意技：左アッパー

HP 50

PW ★★☆☆☆

DF ★★☆☆☆

SP ★★☆☆☆

闘技場内の特殊なセンサーにより計測された能力を、対戦ゲーム風に数値化されたステータス。
そして……

『はぎうう——っ♥♥♥ ちんぽおお——っ♥♥♥ おちんぽはもうらめなのおっ♥♥♥
んっぎひひひひひひひっ♥♥♥ もう中出しはっ♥♥♥ なからしはひやめえ♥♥♥
おまんこたすけ……へひひひひひひひひひっ♥♥♥』

選手PVとして、エロリンピックでの痴態——「タマ挿れ」という競技で「穴」役になったみくが「タマ」
役の男たちに輪姦され、陵辱の快感に啼き叫んでいる光景が映し出される。
大勢に犯され、嫌がりつつも男性器を讃えるような言葉を吐いて膣内射精に善がり狂う映像とリング上のみ
くを交互に見ながら、観客は嘲笑罵倒を浴びせていく。

「うぐぐっ……これ消してって言ってるでしょ～！」
【あんた見た目以上にスケベなんだな！】
【コレ見てたぜ、次は俺も混ぜてくれよ！】
【淫粉症なんだろ、とっとと潮噴きしろや！】
「っ……もういいっ！ サクッと勝って消してもらうんだからっ！ さあ早く出てきなさいっ！」

やはり大勢に視聴されており、隙あらば何をされるか分からない。
そんな目で見られる現状を変えるには、試合に勝利して映像も記憶も消してもらうしかない。
みくの呼びかけに答えるように、対戦相手も登場する。

『みくのと戦相手はこちら——！』
「……えっ？ な、なにあれ……」

——クロマル 年齢不詳（魔族）
直径120cm ？？kg
得意技：変形パワーボム・恥ずかし固め
戦績：365勝3敗
HP 500
PW ★★★★★
DF ★★★★★
SP ★★★☆☆

『おお～っ！！ 初戦からクロマルの登場です！ これはみく選手、運が悪い！！ そしてリングは電流ス
テージ化！ ロープに電流が流れますっ！』

現れたのは異形——直径が背の低い人間ほどの黒い球体で、大きな目を一つ開かせて宙に浮く魔物だ。

こちらもステータスと画像が表示され、格闘ゲームのように向き合う形でみくと対比されている。

ステータスはみくを大きく上回っており、とてもまともな対戦にはならない。

勝敗が分かる試合に観客たちはまた愉快そうにするが、みくにはステータスが見えないため、どれほど力量不足か全く気付けない。

人外の様相に驚き、たじろぐものの、ただそれだけだ。

電気ロープにも同様で、要は当たらなければ良いと割り切り、むしろ謎の自信さえ溢れてくる。

「ん〜……ちょっとびっくりしたけど、ただ丸いだけでそこまで大きくないし、
動きはゆったりしてそうだし……ロープにも当たらなかつたらいいんだよね……イケるんじゃない？
この丸いの倒せばいいんだねっ」

『異形を前にしても自信満々のみく！ これは華々しいデビュー戦となるか？！ さあ試合開始です！』

——READY……FIGHT！

「手もないのにどうやって攻撃するの？笑 一気に終わらせてあげるっ！」

スクリーンにはライフゲージまで現れ、完全に格闘ゲーム風に演出されると、みくはゴングと同時に、ふわふわ浮かぶ球体に向かってダッシュ。

一気に間合いを詰め、得意の素早い連続攻撃を仕掛けていく。

「いっくよ〜！ はあああっ！」

『みく、開幕ラッシュ！ クロマルに打撃を浴びせていくー！』

「どう？ 文字通り手も足も出ないでしょっ！」

素早い打撃のコンビネーションを叩き込み、回り込んで再び連打。

クロマルは球体に固まるだけで、一方的に攻められ続ける。

攻撃が効いていると思い込んだみくは、そのまま大振りのハイキックを繰り出すが……

「少しは反撃してみたら？ させないけど……ねっ！」

ずむんっ♡

「くほおおうっ♡♡」

『みくのハイキック——しかしここでクロマルが反撃！ 球体から伸びた触手がモロに股間に入った——！』

固まるだけで攻撃しないため効果有りと見込んでいたみく。

しかし実際はほとんどノーダメージであり、調子に乗る瞬間を狙って攻撃するために敢えて防御に徹していたのだ。

『そして服が引っかけられ……』

「あっ……何するの、やめてっ♡」

びりいっ♡

「いやあああっ♡♡」

『引きちぎられた——！ ボクシングウェアがあっさり破られ、下着が丸見えです！』

ウェアがいとも簡単に四散し、下着——エロリンピックの時と同じ、赤のブラとTバックが露わになる。

またも男たちの前で肌を露出して恥辱に身を隠すみくだが、感度が高いために辱められても望まぬ興奮に襲われ、淫粉症のせいで愛液まで滲んでくる。

【あの時着てた勝負パンツじゃん！】

【やっぱ期待してたんだろ？！】

【もっとケツ見せろオラッ！】

罵倒する観客たちに呼応するように、みくのエロリンピックでの雄姿がスクリーンに映される。

パイプホールド——巨大な筒に跨って這い進む際の画像に男たちが更に歓喜し、実況にも煽られてたっぷりと視姦される。

【いいぞ！ もっと先のステージも映せ！】

【むしろ犯せ！ 殺せ！】

【【コワセ！ オカセ！ コロセ！】】

「やだっ……見ないでっ♡♡ あの時の事はもう忘れてええっ♡♡」

集団に過激な罵倒を送られるが、みくは恥ずかしがってはいるものの、エロリンピックの記憶を思い出して再び羞恥心に震える。

太股に愛液が伝い、ぶるっと揺れるところへ更に追撃が迫る。

「ああっ♡♡」

『隙だらけのみくに再び触手が伸びる！ 身体を絡めとり——』

「いやっ！ どこ触ってるのっ♡ やめっ……♡」

ばちいんっ♡

「あああああっ♡♡」

『まずはスパニング——！ 両手両脚に控えめな胸、反して大きなお尻までまんべんなく引っ叩く——！』

「やっ♡ やめっ♡」

ばしっ♡ ばちいんっ♡ びしいっ♡

「あぎやあああっ♡♡」

多くの触手でみくの手足を拘束すると、一本の太い触手が鞭のようにしなり、手足から性感帯まで隈なくスパンキング。

全身の肌が赤くなるまで叩かれるが、酷い痛みにも襲われながらもみくの身体は更に発情。
叩かれながら絶頂相応にまで性的快感を得てしまい、ヒザまで流れた愛液を観客が嘲笑う。

【淫粉症だからって濡れすぎだろ！】

【とっとと潮噴けよスケベ女！】

「こ、こんなはずじゃ……♥」

ぎゅいいいいいいいっ♥

「きやああああああっ♥♥ 何してるのっ♥♥ そんなっ♥♥ ああああああっ♥♥」

『今度は触手がドリル状に変化！ 小さな下着の上から宛がい股間を掘削攻撃——！』

次は太い触手の先端が膨らみ、ドリルのように螺旋を描いた。

そして高速回転するとみくの股間——膣孔へ下着越しに突き挿し、痛みと性感を同時に与える。

【おい声出てるぜ？ そんな攻撃で感じてんのかよ！】

【ドリルで掻き回されてこっちまでマン汁飛び散ってねーかあ？！】

「いやああっ♥♥ これはっ♥♥ 違うのっ♥♥ 汗なのおおっ♥♥

あああっいやあああああ………♥♥」

愛液が飛散し、ギャラリーの嘲笑が止まらない。

秘部の痛みも発情も凄まじく、軽く絶頂までしており、充分に精神と肉体のダメージは大きいのが……容赦なくクロマルは攻撃を続ける。

『今度はみくの身体を持ち上げた！ びしょびしょの股間が晒される——！』

「だめえっ♥♥ 見ないでっ♥♥ 見ない……ああっ♥♥」

『ここで一気にロープへ振り下ろし……』

ぶうんっ……ずしいいんっ♥ パチパチパチパチィィィッ♥

「あっ♥♥ ぎやああああああっ♥♥」

『電流ロープを使った変形アトミックドロップ——！ 激しい電圧が股間におしつけられる——！』

股間を広げさせて辱めたかと思うと、その股間を電流流るリングロープへと叩き付けた。

急所に刺さる電撃責めに悲鳴を上げるが、男たちは白熱して追加攻撃を要求。

応えるようにクロマルが再びみくの身体を持ち上げる。

「あがががっ♥♥ あぐああああっ♥♥」

【いいぞ！ もっとやれ——！】

【やっぱこれだな、電流でアへるみくが見たかったんだよ！】

【これ半分イッてねーか？】

【威力が高すぎて分からねえな……じゃもうイッパツだ！】

ぶうんっ……

「あっ……ああ……♥♥ やめ……もう……びりびりはああ……」

『再び持ち上げる！ しかし今度はロープではなくコーナーポスト——！』

がっづうんっ♥ バヂヂヂイイツ♥

「んっっ♥♥♥ お〇お〇お〇お〇お〇おっ♥♥♥」

プッシャアアアアツ♥♥

『ここで遂に絶頂——！ コーナーに打ち付けられる痛みとロープからの通電に淫粉症特有の大量潮噴きだ——！』

今度はコーナーを使った変形アトミックドロップ。しかも両脚がロープに触れて電流まで足され、あまりの衝撃に耐え切れず潮噴き絶頂。

激しく感電して痙攣するみに、レフリーも継戦可能か確かめる。

【ボックス？】

「あ……♥♥♥ ああ……♥♥♥」

『確認してませんが……まあ大丈夫でしょう！ 続行です！』

やはり心配するのもポーズだけであり、雑に判断されて強制続行。

動けないみくに、クロマルが最後のラッシュをかける。

「も……お♥♥♥ やめ……♥♥♥」

バヂイッ♥ バリッ♥ ビリイイイツ♥

「んほおっ♥♥♥ あひいいいっ♥♥♥」

『クロマル、触手に帯電させて連打！ 電流触手で責める責める責める——！ そして——』

ぎちいいっ♥ バヂバヂバヂバヂバヂイイツ♥

「んんおほっ♥♥♥ おああっ♥♥♥ やめっ♥♥♥ やべへえええっ♥♥♥」

『変形チョークスリーパー！ 完全に極まった雁字搦めの触手から電流——！』

ぎりぎりぎりぎりっ♥ バリイイイイイツ♥

「いやあああああっ！！♥♥♥ あ♥♥♥ あがっ♥♥♥

も……らめえっ♥♥♥ ひぎいいいいいっ！！♥♥♥」

プシャアアアツ♥♥ ビクッ♥♥ ビクンッ♥♥

——クロマル WIN！！

『ここで決まってしまった～～！ クロマルの無慈悲な電流チョークでみく選手失神KO——！』

チョークスリーパーのように密着されて絞め上げられた状態での電流責め。
逃げ場もなく性感帯まで刺激する触手チョークで意識が朦朧とする中、絶えず流される電流。
もはや息も絶え絶えのみに抗う術はなく、ここで再び大量潮噴きして完全に意識を手離してしまう。

【やっぱマゾだったじゃねーか！】

【いい潮噴きだったぞ！】

【次もハデにぶちまけてくれよー！】

【ほら、とつとと二回戦いけ！】

『さあ、みく選手が失神から気を取り戻し次第、続けて第2試合スタートです！ 皆様少々お待ちください！』

失神しても全く遠慮なく飛び交う揶揄と罵声。

観客だけでなく闘技場も容赦する気は全くなく、ここまで痛め付けておきながら、みくは休む間もなく連戦が求められる。

クロマルから解放され、リング上で無様に固まって失神したまま、

ピクン♥ ピクンッ♥ と痙攣しているみくが大型スクリーンにアップで映し出されると、観客席の所々から生臭い匂いが発生し、会場の湿度を上げていく……

